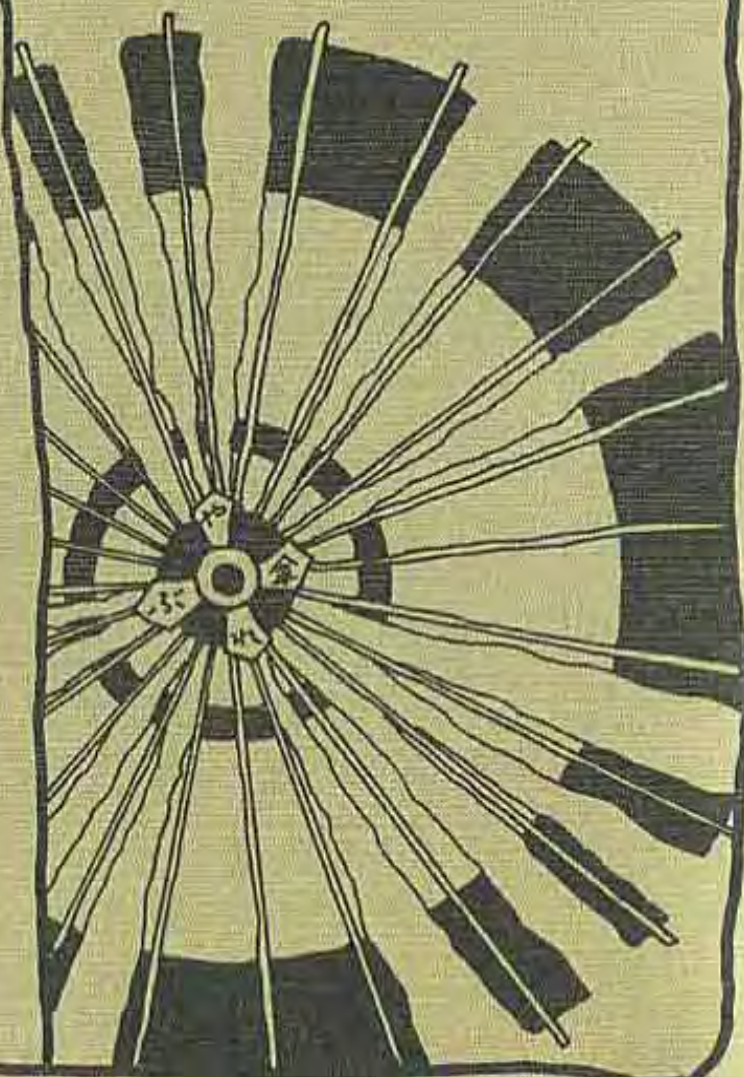


やぶれ傘



九十二号

二〇二六年十月

数珠玉に出水の泥の乾きみる

根橋宏次

黄身流れ二百十日の目玉焼き

きくちきみえ

野分後の砂利の握りを踏みにけり

大島英昭

五位堂の音が無月の空をゆく

藤井美晴

戦中の話や雲の峰遠く

廣瀬雅男

午後の風立つて箒木揺らしけり

丑久保 敏

やはらかき雨も三日や証印

青谷小枝

磯への鉄梯子降り月見草

瀬島酒望

初秋の川原の空のちぎれ雲

白石正朝

この畑の向かうは田んぼ草葎雀

渡邊孝彦

秋の夜に指輪の石の転げ落つ

小山陽子

ははきぎの影にかくれて子等のかけ

菊池洋子

夕風のすすき夕日のすすき道

安藤久美子

雷鳴の中才カリナの音の流れ

久世孝雄

里は夏飛込み岩の今もなほ

秋山信行

抄

集

句

傘

れ

ぶ

や

大崎紀夫 選

数珠玉や流れは瀬を越えて落ち

天野美登里

もたもたと蛸蝸の走る真つ昼間

有賀昌子

公園の猿も片陰離れざる

松村光典

箒木の二本ほどを壊とし

松本正生

菓の陰に西瓜の鱗の見えてをり

村田 武

冷房をかけて聲をころころす

伊藤更正

木犀の香のある駅に列車待つ

小池一司

持合の皮の長椅子冷ややかに

大野芳久

幕間のロビーにぎやか秋拾

奥田麗子

しやきしやきと担振かる音狂寝さめ

黒木東吾

白粉花に触れて路地へと曲がりけり

小巻若菜

ギヤロップして夏野へ入る仔牛かな

時田義勝

夏蝶や水かけろふの弁財天

貫井照子

雲海に浮かぶ孤島や箱館高

野口兼代志

へリコプター二百十日を低く飛び

橋本美代

硫 気 孔

大 崎 紀 夫

炎 昼 とな り ぬ る 交 叉 点 の 先
ひ ま は り を 見 て ぬ て い つ か 雲 を 見 て
岩 鏡 す こ し は な れ て 硫 気 孔
鯨 を 焼 く 空 の う つ す ら 曇 る 日 は
扇 風 機 ま は し て ガ ー ド 下 酒 場

葡萄食ふ隣りの屋根のうへに空

ぽんぽんと威し銃ぽんぽんとまた

手と鎌のふたつがのびて数^ず珠^ず玉^こ刈る

コスモスの真上で電話線工事

格納庫前に小型機秋の雲

台風がくる日ねぢりんぼう齧り

銀杏のほひかなりの近さより

数珠玉

根橋宏次

獅子独活の花のまはりに天気雨
散髪に眼鏡をはづす敗戦日
秋ざくら自転車ぐるみ乗る電車
湖の艇庫の空を去る燕
冬瓜のおほきな方が捨てらるる
ひとしきりたうもろこしを手折る音
雨すこし墓に狐の剃刀に
大川に秋の水母の二つ三つ
数珠玉に出水の泥の乾きぬる
竿ふればとほくに音が秋の海

二百十日

きくちきみえ

明け方の雨戸繰る音梅雨寒し
燕の子中の一羽が下を向き
道よぎる四万六千日の猫
ひまはりの腰の辺りで開きさう
太陽の渦まいてゐる夏の川
地の蟬の掃かれて風の軽さかな
学校の理科室にあるウシガヘル
打ち水に何か混ぜる鮮魚店
秋蟬のこゑのあはひに入りけり
黄身流れ二百十日の目玉焼き

秋の蟬

大島英昭

蓮の花見て界限をぶらぶらす
富士山がうすうす見ゆる竹煮草
月見草無蓋車両がとほりけり
リサイクルショップにいい蟬のこゑ
早稲の穂が出て午後の日はやはらかく
竹藪の向かひに倉庫秋の蟬
橋渡り臭木の花を右に折れ
野分後の砂利の湿りを踏みにけり
残暑やはらぐ農協は十時より
ヒメムカシヨモギの影を道に踏み

草もみぢ

藤井美晴

人が来る白さるすべり散る下を
居酒屋の入り口蟬が死んでゐる
水迅し石におはぐるとんぼゐて
郵便のバイクが南瓜畑来る
嵐来る報聞きをればつくつくし
五位鷺の声が無月の空をゆく
大雨の過ぎたる朝の林檎の香
秋空が映つつて青い水たまり
高曇り木の実をひとつ拾ひけり
草もみぢ伽藍の跡にただ礎石

雲の峰

廣瀬雅男

戦中の話や雲の峰遠く
鰐口の音聞こえる百日紅
水底を小魚走る秋の川
街川の向う岸よりつくつくし
秋の昼絵文字のメール受けにけり
紫苑咲く取壊されし家の跡
づかづかかと長靴の行く草の花
秋高し合宿の子等土手走る
三層の天守閣より初紅葉
茨の実雨後の水嵩増す岸辺

箒 木

丑久保勲

午後の風立つて箒木揺らしけり
ダンプカー静かに止まる炎暑かな
動き出す貨物列車へ大西日
かりかりのバゲットちぎる朝曇り
ビアホールの団扇を使ふ交差点
抜きにくき昔の画鋏夜の秋
かなかなのこゑ焼き肉の食卓に
急須より最後の滴水やうかん
半開きの庫裏のガラス戸酔芙蓉
幕間の装ひはもう秋モード

鉦 叩

青谷小枝

砂灼くる島へ星見に魚食べに
捌くとき鱭美しき瞳をもてり
新涼の目を閉ぢて弾くバンドネオン
空はもう秋大寺の大麓
のびはうだいの草に花ある秋の寺
底紅のしづかなりけり午後の寺
ジーンズを叩き洗ひに鱚雲
秋天へ枝剪り鋏伸ばしきる
二階建てバスの二階の秋の空
やはらかき雨も三日や鉦叩

月見草

瀬島洒望

油照り廊でありし家の壁
凌霄花や雨水溜りしドラム缶
土用明け老舗の画廊閉ぢにけり
竹垣に残る空蟬女坂
雨粒の光る草むら鉦叩
ぼうふらのぬて舟石の溜り水
干されゐる網に止まりて赤蜻蛉
蹲の水陽炎が底紅に
農機具の試乗会場秋暑し
磧への鉄梯子降り月見草

ちぎれ雲

白石正躬

明けやすの川にはつかかな風ありて
かなかなの風のごとくに来たりけり
仏壇の香のただよふ今朝の秋
初秋の川原の空のちぎれ雲
川風や丈ののびたる猫じやらし
土手に立つ野は秋晴の広さかな
歩く先はたはた一つ飛び出して
魚跳ねてすぐ音消えし秋の川
木の下へ猫の消えゆく秋の暮
ポケットの柿の円みと重みかな

草雲雀

渡邊孝彦

青柿やホースの届く手水鉢
軽トラの祭囃子が後につき
小流れの上に巣を張る秋の蜘蛛
蝸のひとこゑくぬぎ林より
この畑の向かうは田んぼ草雲雀
足もとに用水の音稲の秋
草叢に見つけ南蛮煙管かな
集待宵の町へ小走りパンを買ふ
こほろぎは郵便箱に隠れぬる
秋刀魚焼く煙にぽつぽつ降り始む